

次の文を読んで、知識に関するデカルト理論と信頼可能性理論について論評せよ。

Do Dogs Have Knowledge? (Vanessa G. Nelson)

Do dogs (or other non-human animals) have knowledge? Do they know about the world around them or are they merely relying on their instincts, without any genuine knowledge whatsoever. Many people think animals, such as dogs, do not have knowledge or any capability for rational thought. But what are instincts? Perhaps what people regard as pure instinct is in actuality, knowledge about the world. In attempting to answer this question, let's examine two views about knowledge: The Reliability Theory of Knowledge and the view that knowledge is internally certifiable. The Reliability Theory of Knowledge says that *an individual knows a proposition if the individual is related to a proposition the way a reliable thermometer is related to the temperature it measures*. A reliable thermometer is one for which there is a necessary connection between readings and ambient temperatures. According to the Reliability Theory of Knowledge, if a dog is like a reliable thermometer, he has knowledge. What makes a reliable thermometer? First, it has to be used in the right environment. Second, the internal make-up of the device has to be right. Let's say we have a dog that lives in the backyard of his owner's home. Whenever he is taken out for a visit to the veterinarian, he behaves in a quiet and mild manner. However, as soon as the house becomes visible on their way from the veterinarian, the dog barks and yelps excitedly while wagging his tail. Let's say this happens every time he is taken out for a drive. Can we say that he knows where he lives if his only excited response is when he sees the house? It is plausible to think so. He is like a reliable thermometer because he is always able to recognize his own house (perhaps he has internalized the way to the house). The dog's sensory state is a reliable indicator of what is going on in the environment. The Reliability Theory of knowledge states that S (dogs) know that p (where their house is) if and only if: S believes that p; p is true; in the circumstance that S occupies, if S believes that p, then p must be true. The theory makes use of the concepts of necessity and impossibility. Being like a reliable thermometer doesn't require that dogs have the ability to construct philosophical arguments to show that they are like a thermometer. Therefore, dogs can have knowledge even though they may not know that they have knowledge.

The view that knowledge is internally certifiable comes from Descartes. This view uses an argument for knowledge that is slightly different from that of the Reliability Theory of Knowledge. The difference is that the premises of the argument are either a priori true or knowable by introspection. The premises rely on introspection—by gazing within your own mind and examining its contents. His idea comes to this: if the subject knows that the objective conclusion is true, then the subject must know this independently of sense experience. A dog would have to use introspection and a priori reasoning to establish the required connection between what is inside the mind and what is outside it.

The Reliability Theory of Knowledge gives a more plausible answer to the question of whether dogs have knowledge. Dogs have knowledge because they are like a reliable thermometer; they have a connection with the outside world that they inhabit. They do not need to use introspection or a priori reasoning to establish a connection between what is inside the mind and outside it; they simply learn and gain what is called knowledge. According to the Reliability Theory of Knowledge, the linking premise doesn't have to be knowable by introspection and a priori reasoning. As a matter of fact, this theory maintains that the subject doesn't have to know that the linking premise is true at all. It is the more plausible view since dogs are not as highly advanced as humans, and therefore, not highly advanced enough to know about the outside world by introspection.

## ポアンカレの場合<sup>1</sup>

[ユークリッド幾何学と非ユークリッド幾何学]

ポアンカレ (Henri Poincaré, 1854-1912) はユークリッド幾何学がアприオリに真であり、それを真にしているのは私たち自身であると考えた。この点ではカントと同じである。しかし、私たちがどのようにユークリッド幾何学を真にしているかという説明はカントと全く異なっている。非ユークリッド幾何学の相次ぐ発見は空間の真なる構造はアприオリに知ることができるというカントの考えを脅かした。ポアンカレは微分方程式で定義される関数の研究において実際に非ユークリッド幾何学を使っていた。また、非ユークリッド幾何学の相対的な無矛盾性もよく知っていた。ポアンカレによれば、幾何学は世界について何の予測も行なわないので、経験の中には幾何学自体に矛盾するようなものはない。非ユークリッド幾何学はユークリッド幾何学と同じ論理的、数学的な合法性をもっている。すべての幾何学的システムは論理的には同等であり、どれか一つが真なる幾何学ということはない。幾何学の公理は総合的でアприオリな判断でもなければ、分析的な判断でもない。それらは規約、あるいは姿を変えた定義に過ぎない (conventional

<sup>1</sup>ポアンカレについては C. N. Glymour, *Thinking Things Through* に負う。彼のことを Web で検索してみよう。

definition)。

(問) 命題  $A$  から命題  $B$  が導出できるとき、命題  $A$  が無矛盾なら命題  $B$  も無矛盾であることを使って、命題  $B$  が命題  $A$  に対して相対的に無矛盾であることを説明せよ。

ポアンカレによれば、すべての幾何学は空間の同じ性質を扱っているが、それぞれの幾何学は独自の言語を使っている。異なる言語を使っている、同じ実在についてのものである。というのも、一つの幾何学は別の幾何学に翻訳できるからである。一つの幾何学を選択する基準は経済的な単純さである。通常私たちがユークリッド幾何学を日常世界で使う理由はこの単純さである。だが、時には非ユークリッド幾何学のほうが単純な場合がある。そして、相対性理論はこのような場合の典型である。

[科学理論の規約性]

ポアンカレの幾何学についての考えは科学理論にも同じように適用できる。すべての科学理論は自らの言語をもち、規約によって選ばれている。だが、予測や事実に関する一致や不一致は実質的なもので、客観的である。科学は客観的妥当性をもつ。科学者が自由に選ぶ言語、公理は規約によるが、その妥当性は客観的な観測によって判定される。科学法則は、したがって、二つの部分に分解される。一つは原理で、これは規約によって真であり、他は経験的な内容をもつ法則である。

「天体はニュートンの重力の法則にしたがう」という法則は次の二つに分解できる。

- 1 重力はニュートンの法則から出てくる。
2. 重力は天体に作用する唯一の力である。

1 は原理であり、規約である。だから、それは重力の定義となる。2 は経験的な法則である。

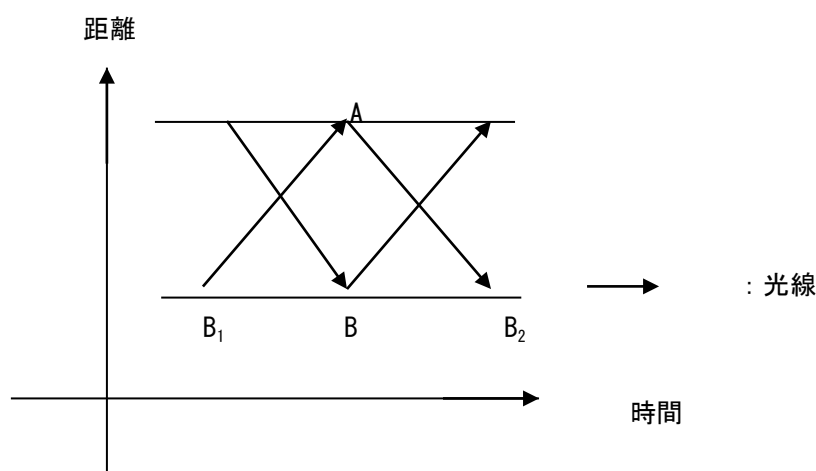
物理学と幾何学を組み合わせることによってだけ経験によってテストできる予測を行なうことができる。幾何学と物理学を組み合わせを行なった観測が矛盾をもたらす場合、私たちはいつも物理学を代え、ユークリッド幾何学は変更しないようにする。したがって、ユークリッド幾何学の正しさは人間の決定判断の規約的な問題である。これがポアンカレの規約主義 (Conventionalism) である。どのように観測結果を解釈するかにはいつも選択の余地がある。そこで、私たちはいつも幾何学が正しいように選択する。それはなぜなのか。ポアンカレによれば、非ユークリッド幾何学を採用せずに物理学を変える方が私たちの信念の全システムをより単純に保つことができるからである。ポアンカレの規約主義はカントの数学的真理についての説明とは別の説明を与えてくれる。カント、ポアンカレ両者にとって、数学は帰納的推論に基づいてい

(問) ポアンカレは数学と科学理論の規約性をそれぞれどのように考えたか。

[アインシュタインの同時性]

ポアンカレに影響を受けて、アインシュタインは二つの物理的出来事の間での同時性関係の決定の幾つかは規約的だと考えた。下の図のような距離の離れた  $A$  と  $B$  の出来事が同時に起こっ

たかどうかという問いが与えられたとしてみよう。さらに、A と B はほとんど同時に起こるので、A が起こったときに送られた光線は B が起こった後でしか到着できないし、B が起こったときに送った光線も A が起こった後でしか到着しないでしょう。光は有限の速度をもち、どんなものも光より速く動けないというのが特殊相対性理論の原理の一つである。そして、これは今の例でも成立している。すると、私たちに A と B が同時に起こったかどうか決定する経験的な術がないことになる。A と B が同時かどうかは規約の問題だというのがアインシュタインの答えである。実際、下の図では B<sub>1</sub> から B<sub>2</sub> までの間に起こるどのような出来事も A と同時である資格をもっている。では、どのような選択が規約として好ましいのか。より単純な規約がよいというのがポアンカレ、アインシュタインの答えである。



アインシュタインの教え子であったライヘンバツハはこの規約主義の考えをさらに押し進めた。ライヘンバツハは、運動の基本法則が、それがニュートンのものであれ、アインシュタインのものであれ、正しいならば、それは規約によって正しいと考えた。つまり、ニュートンの運動法則、アインシュタインの運動法則、その他の法則のどれを使おうと、私たちが選ぶ運動法則を真で反証できないものにするのは私たちの規約や決定である。

カントにとって、ある概念が別の概念に含まれるゆえに真であるような判断が分析的真理であった。規約主義者にとっては、分析的真理は私たちが使う言語に含まれる規約、あるいは帰納的な実践のゆえに真である文を意味している。論理的真理は分析的である。同様に、幾何学、算術、物理学の一部、「すべての独身者は未婚である」のような日常的真理はみな分析的である。

(前回の補足への補足)

### 同次性の呪縛

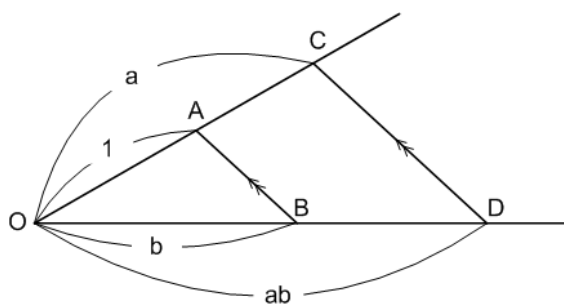
フランスの数学者ピエール・ド・フェルマー (Pierre de Fermat, 1601-1665) は、古代ギリシャの数学者アポロニウス (Apollonios of Perga, B.C.262-B.C.190) の著した『円錐曲線論』を研究し、図形を方程式で表現した最初の数学者である。それまでは、数式の計算と図形の問題は全く別々のものだと考えられていた。古代バビロニアや古代ギリシャでも、限定的に幾何学の計算に代数学を応用することはあったが、面積や体積を $x^2$  や $x^3$  に対応させて方程式を解くといった程度だった。座標という概念や、より一般的な曲線や軌跡の表現に

も代数方程式を使ったのはフェルマーの功績である。解析幾何学への道を拓いたフェルマーは古代ギリシャ人同様、**方程式の同次性**にこだわり、異なる次数の項を含む方程式を幾何学の文脈で認めなかった。同次性が満たされていると、 $x+y=a$  は「辺の長さの和  $x+y$  が、長さ  $a$  に等しい」ことを示し、 $x^2+y^2=z^2$  は「面積の和  $x^2+y^2$  が面積  $z^2$  に等しい」ことを意味することができる。しかし、この視点に固執すると、例えば  $y+xz+xyz=0$  という式は、「長さ と面積 と体積を足す?」という幾何学的に無意味な主張をしていることになる。

この呪縛を解いたのがデカルト (**René Descartes, 1596-1650**) である。デカルトは幾何学においてできえ、辺、面積、体積などの区別をせず、数そのものを研究した。これは計算における大きな視点の転換だった。デカルト以前の数学者にとって、 $a$  と  $b$  が辺の長さを表わす場合、 $ab$  は  $a, b$  を辺の長さとする長方形の面積を表わす量である。これに対しデカルトは、 $ab$  も単にある数を表すだけであり、次の比例式の第四項を表わすに過ぎないと考えた。

$$1 : a = b : ab$$

この式の第四項が必ずしも面積を意味しているのではないことは、次の図から分かる。図



中、 $ab$  も  $a$  や  $b$  同様、辺の長さを表わしている。

(線分  $AB$  と線分  $CD$  が平行なので、 $OA : OC = OB : OD$  が成り立つ。)  $ab$  に対してさらに同様の図を描けば、今度は三次の項で辺の長さを表わすものが求められる。この操作は無限回繰り返せるので、結局、辺の長さであっても  $x^n$  の形の項は幾らでも存在しており、

これらの和や差も幾何学的に無意味ではなくなる。

次数が違う文字同士の計算や、高次の代数方程式でも、幾何学的意味を失わずに文字計算を行える道が拓けることになった。これ以後、代数的演算と幾何学的演算の対応はより自由になり、代数学の成果を幾何学に存分に応用できるようになる。幾何学的方程式が「同次式の呪縛」から逃れるのに随分と時間を要したのである。

## 心の哲学

---

最初に、「君は心についてその存在、その特徴、その歴史、その未来についてどのような見解をもっているか」を自問自答してほしい。これから述べられることが、その解答とどれほど類似し、どれほど異なるかをじっくり考え、心に関する私たちの知識の現状を理解し、自らの心について自らの見解をもってほしい。

---

[科学主義と人文主義]

哲学と科学は全く違ったものと見なされる場合が多い。その理由の一つは人文主義と科学主義の異なる系譜、伝統であろう。二つの異なる神話のいずれが正しいかといった問いは人文主義のもとでは意味をなさない。だが、古典力学と相対論は世界についての異なる見方に過ぎないという主張は物理学では誤りと考えられている。では、心についてはどうか。心は人文主義の伝統と科学主義の知見が拮抗している領域である。心を神話や宗教、あるいは文学を通じて理解することは今まで行われてきた伝統である。と同時に、心を科学的に解明することも現在活発に行われている。哲学の問題を人文主義、科学主義のいずれの立場から考えるかで、その結果は大きく異なってくる。

哲学の基本的な謎の一つは心をもつ人間が自然の中で占める地位である。何が心的なもの (the mental) をそうでないものから区別するのか、心的なものとは心的でないもの間にはどのような関係があるのか、心的なものはそうでないものと根本的に異なるのかといった問いを誰もが何度かはもったはずである。私たちは他の物体と同じように自然の法則に従う対象なのか、それとも特別の対象で自然法則を生み出し、適用する主体なのか。この問いに対するありふれた答えは、私たちは自然の法則に従うと同時にその法則の適用範囲を超えた特徴や性質ももっているというものであろう。身体は自然法則に従うが、心はそうではないというのがデカルト以来の伝統的答えである。そして、この答えは私たちの日常生活で様々な問題に解決を与える指針になってきたが、同時に多くの問題も引き起こしてきた。ここでは心をどのようなものと考えたらよいかを探ってみよう。残念ながら、未だ私たちは心に関する新しい統一的な見解を共有していない。だから、共通の理解に達するための基本的な事柄を検討して見るのがここでの目標である。

#### [心についての二つの立場]

心の不思議さを表わす次の二つの推論を考えてみよう。

- (1) 心は自然の所産である。自然科学は自然を対象にする。したがって、心は自然科学の対象になる。
- (2) 心は志向的 (intentional) ある。つまり、心は何かを表象する。その中には自然についての表象も含まれる。したがって、心は自然科学を対象にする。

それぞれの文を別々に考えた場合、両方ともごく自然に正しいと認められるだろう。(1)では心が進化や発達の結果として、この世界にある対象と考えられている。(2)では何かを考える主体と受け取られている。しかし、二つの文を同時に考え、併記すると、心と自然科学のいずれがいずれの対象なのか迷ってしまう。この迷いこそ世界の中での心の独特の地位を描き出している。(1)と(2)はそれぞれ科学主義と人文主義の心に対する基本的な視点を表している。ここでは(1)の立場から以後の話を展開するつもりである。したがって、この立場では(2)を(1)の立場からどのように説明するか、つまり、どのように

(2) を (1) に還元するかが問題となる。

(問) 「心は自らを研究対象とする」という主張は上の (1)、(2) とどのような関係にあるのか。追求する主体と追求される対象が同じということはあるのか。それが不可能だとすると、自己点検、自己評価はできないことになることも説明せよ。

#### [心の様々な理解]

デカルトの考えでは、身体と心は互いに他の助けなしに存在できるという意味で、二つの異なる実体である。そして、心的実体（心）の心的性質は物理的実体（もの）の物理的性質と因果的な関係をもっている。ところが、ヒュームはデカルトと違って心的実体の存在を否定する。というのも、心的実体に関する印象を私たちはもつことができないからである。私たちは感覚印象、記憶、予期をもつことができるが、自己そのものに対応する観念をもつことはできない。だから、心は実体ではないとヒュームは考えた。このように過去の代表的な哲学者の心についての考えでさえ大きく異なっている。心的な性質は物理的な性質の組み合わせに過ぎないと考える哲学者がいたとすれば、物理的な性質は心的性質の組み合わせに過ぎないと考えた哲学者もいる。（例えば、カントは後者の代表である。）あるいは、ホッブスは推理や判断は計算の一形式であると考えた。身体は計測器として働き、その計測器の状態は外的な世界の出来事を指示する、表示するという記号的な役割をもっている。心は特別の仕方で機能するものであるが、心的なものはすべて物理的なものに還元できると彼は考えた。人が違えば、そして時代が異なれば心についての捉え方も異なる。これを信頼できる心についての理論などどこにもないと否定的に受け取る人も、難解な心について人間は実に様々な捉え方をし、心の本性を様々な角度から照らし出してきたと肯定的に受け取る人もいるだろう。いずれにしろ、その結果、心は複雑極まりなく、心についての見解は諸説乱立ということになる。このような混沌とした状況をどのように整理し、道筋をつけたらよいのだろうか。

(問) 君自身は「心」と「もの」の区別や、二つの違いについてどのように考えてきたか。

#### [志向性 (Intentionality) とは何か]

本論に入る前に、心の特異な扱われ方について述べておこう。心が他の対象と異なるのはその志向性にあると言われてきた。そこで「志向性＝何かについての（表象、信念）」の特異性を直観的に理解するために「心の歴史」の多義性を考えてみよう。「心の歴史」に対して次の四つの異なる意味が通常考えられている。

- (1) 宇宙や地球の歴史と同じ意味での心の歴史：心の進化－進化生物学、特に進化心理学
- (2) 心の発達の歴史：心の発達－発達心理学

- (3) 心が何を思い、考えてきたかという心が扱った内容に関する歴史
- (4) 心についての考察の歴史、心を私たちはどのように考えてきたかの歴史

これらの4つの意味はいずれも「心の歴史」という言葉で語られてきたものである。ここに「身体の歴史」を代入した場合、どのようになるだろうか。(1)、(2)、(4)は「身体の歴史」に関しても無理なく成立するが、(3)は的外れな表現になる。さらに確認のために、「動植物の歴史」、「日本経済史」といった例も考えてみよう。やはり、(3)はこれらの例に関しても成立しない。したがって、(3)が心についてだけ成立する独特の特徴であり、他にはない意味となるだろう。心が何かについて思い、考えるという特徴は志向性という用語で表されるが、(3)はまさに心の志向的な内容についての歴史である。そこに入る代表的な内容には哲学、科学理論、文学作品、法律、倫理、そして宗教がある。科学史や文学史は確かに(3)の内容を扱っている。

心が志向するものは何か。志向内容は表象か、それとも外部の世界の対象そのものか。あるいは、それらのいずれでもないのか。上の場合、(3)の内容は明らかに心の内側のものではない。科学理論や芸術作品は心の外にある。科学理論は私が知らなくとも図書館の本に書かれているし、ミロのヴィーナスはルーブル美術館にある。

同じように、何かを知覚する場合、知覚内容は外部世界の対象そのものだというのは私たちの日常的な直観に合っている。しかし、何かを思い出す場合、その何かは外部の世界の対象だと考えにくい。というのも、思い出すものは過去のものであり、今ではこの世界に実在しないからである。確かに過去のもものは現在存在しないが、思い出されているのは過去に存在した出来事や対象そのものだと言い張ることはできる。このように考えて、志向の内容は外部世界の対象そのものとする外在主義が出てくる。この自然主義的な外在主義は、しかし、難点を孕んでいる。それは志向の内容が論理、数学、言語に関するものの場合、そして、志向の内容に感覚質(色、匂い、味等)が含まれている場合である。誰も数や論理規則を物理的なものとは考えないだろう。それらはいずれも外部世界にそのまま存在するとは考えられていない。

(問) 心について君がもっとも不思議だ、あるいは不可解だと思っていることは何ですか。

(問) 「心が志向的なのは心が概念あるいは集合名詞であるための当然の結果に過ぎない」という意見について君の考えを述べなさい。

(ヒント)

心は概念であり、その外延が「心的」なものの集合ということになる。「心が何かについての表象や信念をもつ」ときの「何かについて」という独特の特徴が心の志向性と呼ばれてきたものだった。心がもつ色々な状態を要素にした集合を「心」と呼んだとすれば、状態は個々の表象や信念であり、それを表現するのに「犬についての表象」「猫についての信念」といった謂い回しを使うのは言語表現上の慣用に過ぎなく、心の特別な性質を表しているのではない、というのが(問)で述べられている主張である。温度計の状態の集合を温度計の定義にしたとすれば、その状態はすべて何かの温度の表示ということになるが、だから

と言って、温度計が志向的だとは誰も言わないだろう。

### 自然主義 (Naturalism)

自然主義は哲学の用語としてしばしば登場するが、それが正確に何を意味しているかは意見が分かれる。ある哲学者は自然主義を哲学と経験科学の連続性を主張するものと受け取っている。他の哲学者は心と物体の二元論の否定こそが自然主義の重要な主張と考える。あるいは、自然主義の本質は認識論や意味の外在主義的な理解にあるとも考えられている。これら三つをすべて含め、心身二元論や認識論、意味の内主義に反対し、哲学と経験科学を連続するものと捉える立場が自然主義であると考えている哲学者もいる。

私たちの周りにある性質、状態、対象、出来事は自然的なものである。あるものが自然的とは、それが自然科学の基本的な理論によって理解できることである。このような自然理解は昔から存在していた。例えば、デモクリトスの原子論を思い出してみればよい。それは古代の唯物論の典型であり、すべてを原子とその組み合わせによる運動で説明しようとする。スピノザ (Baruch Spinoza, 1632-1677) がアリストテレスの目的因やプラトンの考えを否定し、道徳の自然性や相対性を主張したのも自然主義の例である。ヒュームが実体という概念を否定し、自由、自己、因果性等を心理学的に扱うのも自然主義の典型例である。現代に眼を転じたとき、自然主義的傾向は直接に肌で感じられるほどに強い。その好例がアメリカ哲学と自然主義の関係であろう。他の哲学に比較して、アメリカの哲学では自然主義的な傾向が強い。この傾向は既に今世紀の初頭からサンターヤナ (George Santayana, 1863-1952) やデューイ (John Dewey, 1859-1952) に見られる。その後の分析哲学を中心にした哲学は自然主義的な特徴をアメリカ哲学にもたらしめている。そして、そのような特徴は自然的でない概念を自然的なものに還元する「自然化 (naturalizing)」という用語に端的に現れている。

これらをもとに自然主義の定義を考えてみよう。私たちがもつ最善の科学理論が自然に存在するもののタイプ (性質) を明確にするための最善の指針となる。状態、性質、対象、出来事は科学理論によって実在的だとみなされる場合に限って実在的である。自然主義の主張を簡単に述べれば、科学理論こそが世界の最善の像を与えるというものである。では、科学理論はどのようなタイプを実在的とみなしているのか。それを考えるには科学の本性を見っておかなければならない。通常、自然主義者によれば科学理論は実在する世界についての理論であると考えられている。科学は実在についての研究であるという科学実在論 (scientific realism) の主張は自然主義と重なっている。

さて、自然主義と心はどのような関係になっているのか。すぐに頭に浮かぶのは「心は自然的なものか、あるいは自然科学の対象になるのか」という問いであろう。この問いはまさに自然主義と心の関係を尋ねている。心が自然のものか、それを超えるものかは最初に私たちが問題にした点であり、過去に幾度となく論じられてきたものである。心を自然主義的に理解するというプロジェクトは、心が自然科学の対象に十分なり得るという前提を認めることであり、これは一つの哲学的な立場、態度である。その際重要なのは一見自然的には見えない心の振舞いや特徴 (思考や感情とそれを表現する言語の特徴) をどのように自然化するかということになる。

#### (関連語)

物理主義 科学主義 還元主義